

モデル事業名	耕作放棄地での野菜づくりを通じた地域住民との交流プロジェクト
活動団体名	特定非営利活動法人 宇都宮まちづくり市民工房
ホームページ	http://homepage2.nifty.com/shiminkoubou/
所属/ 担当者名	ボランティアコーディネーター 岩井俊宗
連絡先	028-634-9901、 utshiminkoubou@yahoo.co.jp
活動地域	栃木県日光市三依地区

活動地域の概要

日光市三依地区は横川、上三依、中三依、芹沢、独鈷沢、五十里の6集落で構成。人口に占める高齢者(65歳以上)の割合と集落人口、世帯数は、横川 51.9%、77人、39世帯。上三依 44.9%、89人、36世帯、中三依 52%、225人、106世帯、芹沢 45.7%、81人 36世帯、独鈷沢 66.7%、30人 15世帯、五十里 46.2%、13人、6世帯となる。(平成21年4月1日現在の日光市住民基本台帳より)



【位置図】
栃木県内図



【三依地区中心地】



【上三依地区耕作放棄地再生事業対象地】

活動地域の課題

- ・高齢化と人口減少による「自助」「共助」の衰え。
- ・農作物への鳥獣被害 生きがいづくり農業への意欲衰退 諦め 耕作放棄地 先代から受け継がれた地を荒らしてしまう自責の念 生きがい低下。衰えの実感 未来への諦め。という悪循環が生まれる。鳥獣被害対策として、猟友会などで地域内対応しようにも、高齢化と人口減少により必要性以上の機能を果たせず。担い手も不足。
- ・地域の伝統やしぐみの継承の中で、役職の兼務や会議の出席など1人何役もあり、疲労感。
- ・買物困難(地域内商店がすべて閉鎖)や燃料確保難(地域内ガソリンスタンドがすべて閉鎖)。今は車の移動できる人に相乗りや子どもが持ってきて来るなど何とかなっているが、近年問題化するとみている。

活動の内容

(全体)

地域住民の生活ニーズを発見しながら、地域課題に対応した事業を実施する。参加体験型プログラムを導入し、事業の自立に必要な収益性を高める。さらによそ者の関わりを増やし、担い手を増やしていく。また作物/人材の地域内外循環の社会的実験と調査研究を行う。

具体的には、地域住民と共に汗を流すことで関係を構築し、声を聞く。地域の元気だった頃の象徴であった村の景色(一面大根畑、現在は萱畑)を取り戻すため、ワークキャンプの手法を取り入れ、若者を対象にしたツアーの要素を盛り込み、開墾、作付け、管理、収穫、流通、販売を実施。生きがいづくり農業からお小遣い稼ぎ農業へ(自家消費と交換だけでない都市部への流通を通して、地域を知ってもらうきっかけづくり)。豊かな自然の価値を体感する「三依キャンプ」の実施。 独居老人宅や空き家の雪かき支援事業、 農山村の価値発見と価値発信を通じた「三依ファン」の創出事業

(直近1年間の進捗など)

- ・耕作放棄再生に関して、始め一か所400坪から、現在3か所およそ2500坪に拡大。現在1か所1500坪受入対応中
- ・利用権契約を交わし、宇都宮の直売所2箇所への流通を確保、販売開始。
- ・独立行政法人福祉医療機構の助成金を活用し「地域の担い手育成プログラム研究開発」。農村政策、国際協力、文化人類学、社会福祉、鳥獣害対策、災害、環境保全、中心市街地、市民活動支援、など多岐の分野の有識者実践者へのヒアリングを通し、共通する担い手像と力を明らかにし、育成プログラムを開発。
- ・「三依キャンプ」に大学生の参加とリピーターの参加が顕著に。地域住民も懇親会に参加してくれるなど、内部者と外部者を繋ぐ事業に発展。
- ・「雪かき支援」も、地域の自治会からの依頼や技術指導など地域住民と実施。行政からも仕組み化の相談を受ける。

活動の成果

- ・全体
 - ・現在 4 年目を迎え、毎年 30 回以上の現地での活動を通して、継続性と関わり方から地域住民と顔が見え、話ができる関係を構築できた。人間関係構築の成果だけではなく、農山村にある住民の連帯感の強い社会の中で「外部者」という地域にとっての異質なものを受け入れ、安心と信頼を持てる文化土壌を作り上げることができた。この文化土壌が外部者の受入れる自信につながるものとなり、地域内外が繋がるきっかけを構築できた。
 - ・地域住民を知っていく中で、地域内のパワーバランスやステークホルダーを客観的に捉えることができた。柔軟な動き方ができたおかげで、地域内の対立軸の双方と話ができ、地域の情報を多角的に集約することができるようになった。
 - ・事業実施のためのフィールドや協力者（専門家、ボランティア）、メディアとの繋がりが毎年広がり、継続して関わってくれる方が増えている。
 - ・耕作放棄地を活用した野菜づくり事業は、利用権を設定することができ、流通と販売を可能にし、売上を上げることができた。このことは、ボランティアであっても、事業のキャッシュポイント（現金化できる所）を自ら生み出せることと地域住民にとってお小遣い稼ぎ農業への道を開くことができた。
 - ・地域内で事業の認知が高まったことにより、耕作放棄地の活用依頼が毎年増え、耕作面積も増えている。
 - ・日光市より高齢化集落対策案や雪かきボランティアの仕組みなどの相談を受け、またこちらも相談したりと官民連携ができてきている。
 - ・プロジェクトメンバーの一人が日光市の高齢化集落アドバイザーに就任。
- ・直近 1 年間の成果など
(活動の状況、地域内での反響・効果及び周辺への波及効果等について記入)
- ・地域住民、NPO、行政、大学、企業、メディアなど多様な主体を巻き込むことができた。
 - ・野菜の販売や三依キャンプ、開墾ツアー、映画上映などの自主事業での収益が生み出すことができた（300,000 円）。
 - ・地域の課題と魅力を見せていくプログラムの連動性により大学生等の若者とリピーター（三依ファン）の参加が増え続けている。

今後の課題及び展望

- ・課題（活動を通して発見された課題等を記入）
 - ・伝統行事や日常的な地域の話合いでの、参加者の重複と役職の兼務による疲労感。労力に見合う達成感や積み上げが感じにくく、地域機能を担う意欲が衰退し始める。地域内人材の掘り起こしと外部者関わりによる新たな担い手の確保と育成に取り組むべき必要性が顕著。「限界化のプロセス」における臨界点に近づきつつある。
 - ・地域住民にノウハウのない地域課題（鳥獣被害対策など）に対応するために、地域外の専門家との協力体制が重要。
 - ・持続可能な事業にするための収益性のある事業開発。
- ・展望（今後の取組みや検討について記入）
- ・「三依ファン」を広げ、農山村の担い手コミュニティづくりと人材育成し「都市農村の担い手交流」を促進する。交流の中で、試行錯誤しながらも前に向かって進んでいこうとする姿勢を感じてもらい、地域の担い手意欲を高めていく。
 - ・地域住民の意欲を高めるための“元気だった頃の象徴”であるお祭りの再生事業。
 - ・中心人物以外の地域住民の声を聞きながら、関係構築していく全戸調査の実施。
 - ・各集落ごとに、特色ある地域づくりを行う（横川：耕作放棄地活用野菜作り、雪かき、鳥獣被害対策。上三依：耕作放棄地再生、雪合戦。中三依）
 - ・お米と燃料の地域内流通事業。

その他（自由記述）